

森のちやれんがニュース

2023 春

Newsletter vol.31



グランドホールに約2億5千万年以上前のフズリナ化石！

入館してすぐのグランドホール床、モザイクの石材をじっくり観察してみてください。この石材の中には、小さな化石が沢山含まれています。

モザイクに使用されている灰色の石材は、化石を含む大理石(変成した石灰岩)です。この大理石の表面に見えている“米粒”の一つ、一つがフズリナ類Fusulinida(紡錘虫)と呼ばれる大型の単細胞生物の化石です。フズリナは、今から約2億5千万年以上前の古い時代(古生代後半)にのみ生息していた代表的な化石の一つです。フズリナの仲間には、紡錘形(ラグビーボール状)の外

形をもつものが多く、下の写真のように断面がタマネギ状のものや、渦巻き状の構造を持つものがあります。

周りを注意しつつ、化石を探してみたいかがでしょうか。

(学芸員 成田 敦史)



たくさんのフズリナ化石 (写真：横幅約3cm)



CONTENTS

- ② 博物館活動紹介
「あなたの好きor嫌いな昆虫は？」結果発表！
- ③ 総合展示資料紹介・第3テーマ
うまい米No.1への歴史「舟形網」の秘密
- ④ 研究活動紹介
これまでの調査研究活動について
- ⑤ はっけん広場冬の活動報告
体験学習室「はっけん広場」の再開！
第20回企画テーマ展
「あっちこっち湿地」リメイク展示開催！
- ⑦ アイヌ民族文化研究センターだより
アイヌ文化紹介小冊子「ポン カンピソ」のご案内
- ⑧ 活動ダイアリー
2022年12月～2023年2月の記録

博物館活動紹介

「あなたの好きor嫌いな昆虫は？」 結果発表！

表 溪太
研究部自然研究グループ

2022年の夏、特別展「世界の昆虫」の関連企画として、世界に100万種といわれる昆虫の多様性について考える「昆虫クイズラリー」を総合展示室で開催しました。クイズラリーの最後のポイントは、好きな昆虫・嫌いな昆虫と、その理由を書いてもらう来館者参加型展示としました。2カ月間の会期中に59,554人の特別展入場者に対して、3,577名の方から様々なご意見をいただきましたので、その結果を紹介します。

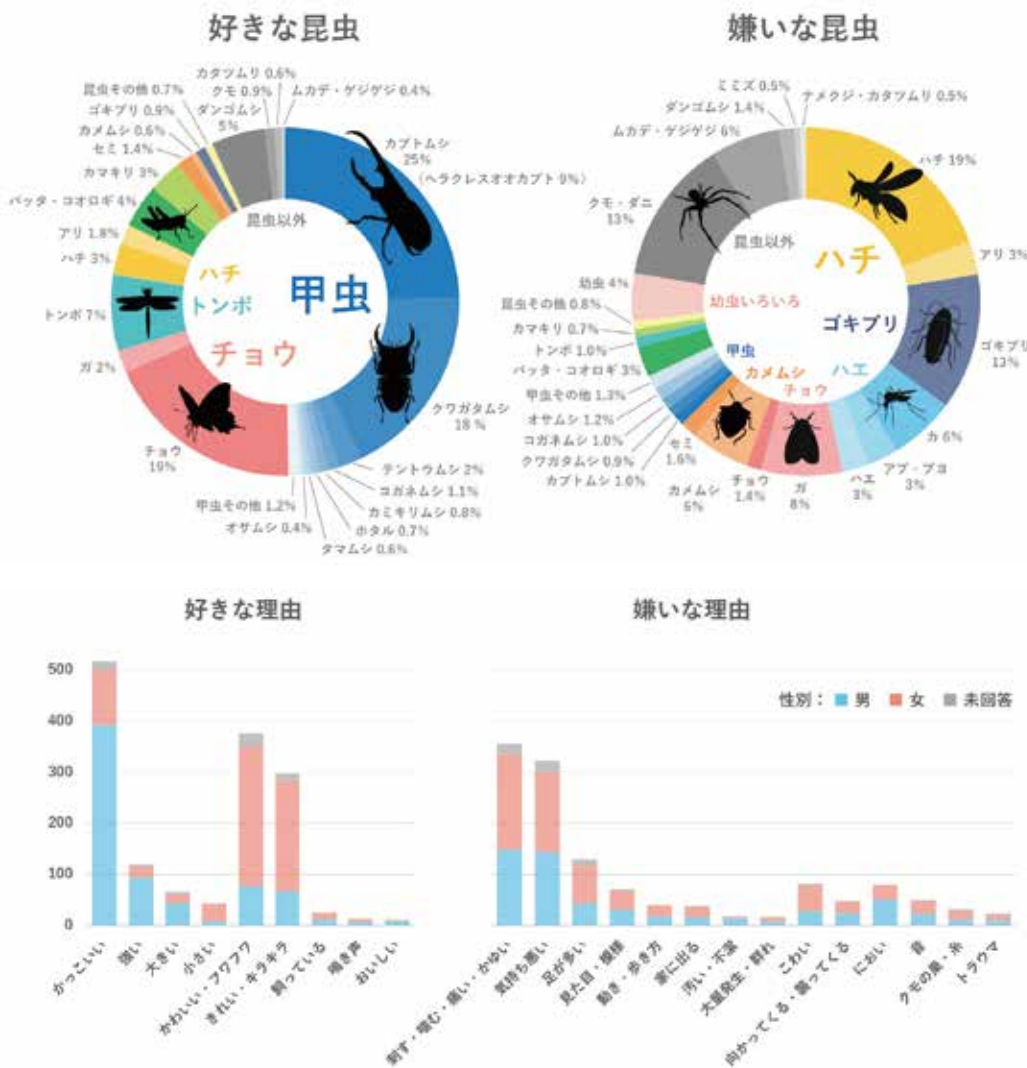
まずは好きな昆虫から見てみましょう

う。圧倒的な人気を集めたのは、やはりカブトムシ・クワガタムシの間で、テントウムシやホタルなどを含めた甲虫類がほぼ半数を占めました。次いで人気のグループはチョウ類、トンボ類と続き、この3つのグループで全体の75%を超えます。好きな理由には男女による差がはっきりと出ました。理由として「かっこいい・強い・大きい」と回答したうち7割が男の子で、逆に「小さい・かわいい・きれい」と回答したうち7割が女の子でした。

一方の嫌いな昆虫は、複数のグルー

プに票が割れました。全国版のアンケートでは不動の不人気トップとなるゴキブリの割合がそれほどでもないのは、寒さでゴキブリの少ない北海道らしい結果と言えます。嫌いな理由を見ると「刺す・かゆい」などの身体的な実害が一番ですが、生理的な嫌悪感からくる「きもち悪い」に具体的な「足が多い・模様・動きが嫌い」などを加えると過半数となります。また、「蛾がインターホンにとまっていて押ししてしまった」、「台所でトマトのヘタを拾ったらクモだった」といった過去のトラウマを書いてくれた人もいました。

なぜ現代人に虫嫌いが多いのかについての最近の研究*によると、都市化によって日常的に見かける虫が生活空間に侵入してくる種類ばかりになったことが一因とされています。さらに、虫の識別ができないほどすべてを一緒くたに嫌う傾向があるそうです。今回の結果でも「全部嫌い」という声がそれなりの数ありました。しかし、昆虫のうち都市に侵入しているものは少数派で、ほとんどの種類は自然の中のそれぞれの居場所にくらしています。そして、世界的に多くの昆虫が人間による生息地の破壊によって絶滅の危機にあることも忘れてもらえればと思います。



※ 特別展「世界の昆虫」の入場者は親子連れが多く、来館者参加型展示の回答者も半数以上は9歳以下で10代とあわせて85%を占めました。また、回答者の90%が北海道内の在住でした。
 ※ 本アンケートの集計には解説員ほか非常勤職員の協力を得ました。
 *Yuya Fukano & Masashi Soga, 2021. 'Why do so many modern people hate insects? The urbanization-disgust hypothesis' Science of The Total Environment.

総合展示資料紹介・第3テーマ

うまい米No.1への歴史 「舟形網」の秘密

山際 秀紀

研究部生活文化研究グループ 学芸主査

今回は、3テーマ「北海道らしさの秘密」の「農業の王国へ」コーナーに展示されている北海道で考案された農具の中の「舟形網」をご紹介します。

高度経済成長期に田んぼの整備が進みましたが、それ以前の北海道は、馬もぬかる湿地で粃を直まきするなど、苦労が多かったとされています。

そんな時代に活躍した舟形網は、全国どこにでもありそうですが、実は北海道らしい農具だったのです。

今では、博物館に展示されている舟形網を見ても、何に使うのか分からない人がほとんどだと思います。しかし、農家の納屋の片隅には、ひっそり残されていることがあります。

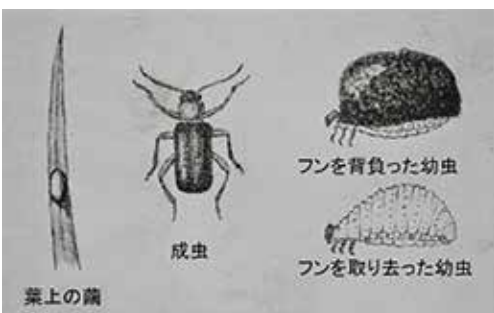
この網は、ドロオイムシとも呼ばれることがあります。それは、泥負虫という虫の幼虫を捕る道具だからです。

それは、長い木柄の先に底が網になった舟がついた道具です。その網を左右に振って稲穂が実る前の葉をなでると、黒い虫がコロコロと入ります。

泥負虫は、イネクビホソハムシという稲の葉を食べる寒地の害虫です。

俗にドロムシ、ドロコ、ドロカツギ、カツギ、ドロカブリ、クロスケ、フンムシ、ベロムシとも呼ばれます。それは、幼虫が泥みたいなものを背負っているからです。その泥は、実は自分のフンなのです。

成虫で越冬した泥負虫は、5~6月に水田の稲を食べつつ葉上に産卵、生まれた幼虫も葉を食べ、繭になり、7~8月に約4~5mmの成虫になります。



泥負虫（『北農試彙報』47 昭和3年）



北広島市でつかわれた舟形網



昭和27年の舟形網（関三雄氏撮影）

舟形網は、その幼虫を捕るための道具なのです。1910（明治43）年、北海道農事試験場（北農試）渡島支場で、支場員が考案しました。

舟形網以前は、ホウキや棒などでたたき落としていたそうです。

1928（昭和3）年の『北農試彙報』には、上面・側面・前面・後面から見た舟形網の図を載せていて、下に左の写真のとおりです。

北海道内には、55の博物館施設で舟形網が展示され、収蔵庫内の資料を含めて100点ほど確認できます。内、約6割が木製枠、約4割が金枠です。

泥負虫は冷害の年に被害が多いことから、試験研究が本格化しました。

1931（昭和6）年には、新種としての学名が認められました。

化学薬剤の研究が進みましたが、農家では舟形網を使い続けることもあったようです。

小平町では、「稲の葉を傷めないように手で取った」という人もいます。

千歳市の昭和一粒生まれの農家の方は、「昔は水田が1町5反あって、泥負虫を網（舟形網）で、早朝3~4時の暗い頃から8時頃の露の消えないうちに、ガンガン（1斗缶）の半分ほど捕ったんだ」と雑草を稲に見立てて使い方を実演してくれました。

北海道大学などが行った食味試験で、最高ランクの評価を幾つも得ている北海道米ですが、今に至るまでには長い歴史があったのです。

研究活動紹介

これまでの調査研究活動について

舟山直治

研究部生活文化研究グループ 学芸員



1958年生まれ。旭川市出身。
1985年より北海道開拓記念館勤務。2015年からは北海道博物館勤務。専門は日本民俗学。

民俗芸能伝承保存会調査
(松前町、撮影日：2022.10.25)

北海道博物館（以下、当館と省略）のホームページ上の筆者の学芸員紹介には、「さまざまな時代や地域を経て北海道に伝わった有形・無形の民俗資料を対象にして、それぞれの経緯や過程を整理するとともに、積雪寒冷地で伝承されている意義とその役割について考察したいと思います」、と記しています。この研究スタイルは、当館前身の北海道開拓記念館（以下、記念館と省略）から大きく変わってはいません。

ただ勤務当初は、専門性のレベルが低く、先輩からの研究指針を頼りに始めた、というのが実態でした。したがって、まずは先輩の調査に同行して、北見地方の曲輪・曲物職人の製作技術を記録する現場の体験、あるいは青森県から京都府まで日本海沿岸地域の建造物や博物館などを巡る旅をとおして学びました。時には突き放されて、初めて単独で道産根曲竹を用いた竹細工の製作技術などの調査をした際には、聞き取りがうまくできず心細い思いをしたことも多々あります。

日常的な博物館活動においても同様に、記念館が開館した1971年前後に集められた生活史資料約1万4千点の内、資料情報が希薄だった小白・小杵、沖弁当箱、背負具、桶・樽について補足調査をするよう先輩に指導されました。この調査の意図は、各資料の入手方法や用途などを、改めて寄贈者などへの

聞き取りをして、資料情報を補充するとともに、「記念館調査報告書」や「記念館年報（後に、紀要）」に公表するというものでした。作業開始後数年は、なんとかデータを補足することができました。しかし、年号が平成に変わってからは、既存資料に直接関わった寄贈者も少なくなり、取得できる情報量が減ったこともあって、この作業は途中で頓挫してしまいます。

また、北海道開拓の村が1983年に開村し、復元家屋の内部展示に向けて集めた資料群、記念館においても1992年の常設展示場のリニューアルに向けて新たに収集した資料群の収集活動に携わる中で、生活史資料は3万5千点に及ぶようにもなりました。この2つの大きな事業に向けて、資料を大量に受け入れた結果、個々の情報は希薄になったものもあります。つまり記念館が開館した時と同じ課題の原因を作った当事者になってしまったのです。恥ずかしい話ですが、事業に追われて資料の情報整備ま

で手が回らなかったと、改めて自戒しています。いろいろと反省することばかりですが、なかには継続している研究もあります。

現在、筆者は当館の「北海道の自然・歴史・文化」総合研究プロジェクト「北海道における戦中・戦後のくらしの変化に関する聞き書き調査」（2020～2024年）の一員として、積丹町の川下神の祭祀、厚沢部町の民俗芸能、札幌市の女夫龍神について調査をしています。今回紹介するのは、図1に示した川下神です。この神様は、記念館最後の学際的地域調査となった第4次特別研究、積丹半島の自然と歴史調査（1985～1989年）でその存在を知りました。

この神様について『日本国語大辞典』（1994）には、「川祭の一種。兵庫県北部から福井県にかけて、六月末ごろ、川の合流点や川口で行なう水辺の祓（はらえ）行事をいい、神社の祭礼になったものもあり、「裾」の連想から川裾様を婦人病の神とするものが多い。川下祭（かわしもまつり）」とあり、川裾、川下という祭神は、婦人病の神で、6月末に川辺で祭祀する祓行事とされています。現在、祭日は新暦の6月末ではなく、旧暦に合わせて7月末という地域が多いようです。しかし、積

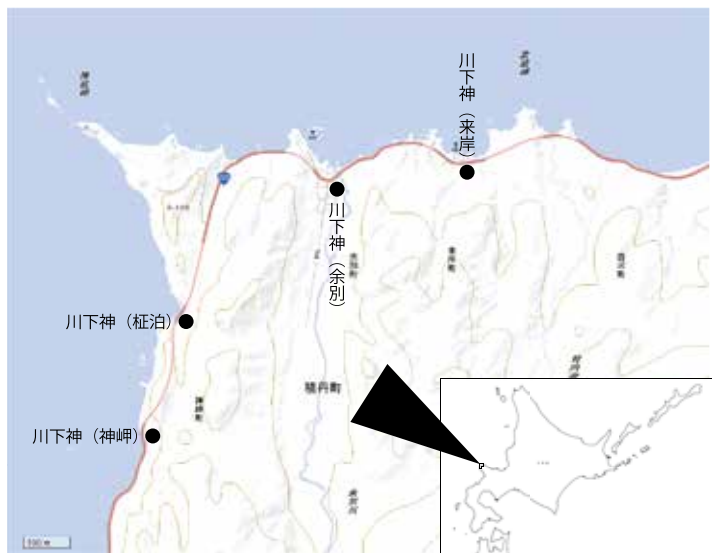


図1 積丹町の4地区で祀られている川下神



図2 積丹町における川下神の祠（左から来岸、余別、桎泊、神岬。撮影日：2023.1.14）

丹町の来岸、余別、桎泊、神岬の4地区の祠(図2)に祀られている祭神は、産の神として、正月と8月の各16日に祭祀している点が特徴的です。

筆者は、積丹町の4地区と他地域の祭祀を比較するために、おおよそ40年にわたって調査を続け、道内では小樽市1件、せたな町2件、江差町1件、上ノ国町1件、松前町1件、福島町1件、知内町1件、木古内町3件、北斗市7件、七飯町1件、函館市8件を加えて計12市町31件の祭祀を記録してきました。道外では、先達の調査をもとに石川県で6件、福井県で17件、滋賀県で9件、京都府で22件、兵庫県で66件、鳥取県で3件、岡山県で2件と、計7府県で125件の祭祀を確認することができました。

これらの調査をとおして、祭神の名称には、川子母神、川志母神、川裾神、川濯神、川裾神、河裾神、河濯神、水無月神、水月神など、時代や地域によっていろいろな表記があることを知りました。呼称についても、カワシモ、カワソ、カワソ、カワソ、カワソなどさまざまです。



図3 桎泊の参拝の様子（撮影日：2023.1.15）

祭神は、祓戸の神とする地域が多いのですが、なかには太陽・月・星の三光として寺で祀る地域もあるなど、神仏混淆の形態であることが伺えます。しかも祭神は、自然石や名号の石碑のほか、観音・不動明王・妙見などの仏像や神像などが祀られています。

さらに科学研究費助成事業「西廻り航路を介して北海道に伝播した大祓の祭祀と伝承をめぐる諸問題の民俗学的研究」(2013～2017年、研究課題番号：25370961)では、柳田國男が「石神問答」(1910)で示した「河裾神 阿波、播磨 川濯明神 陸前」の引用文献についても検討しました。まず徳島市では、「阿波志」(1815成立)をもとに、現在の下助任町に河裾神が祀られていたことを確認しました。次に仙台市では、「封内風土記」(1772成立)から、定禅寺境内社に川濯神が祀られていたことも確認できました。いずれもすでに消失しているのですが、その理由のひとつに1872年の廃仏毀釈が影響していたのではと考えています。

一方、積丹町とせたな町の計6件は、1900年代はじめ頃に祭祀されたものです。このように北海道では、他地域が廃れた後でも新たに祭祀しているところが大きな特徴といえます。

これまでの調査によって明らかになったことは、祭祀地域は兵庫県か

ら福井県の範囲にとどまらず、西は鳥取県と岡山県、北は石川県と北海道にも祭祀されているということです。かつては徳島県や宮城県でも祭祀されており、日本の広範囲な地域で祭祀されていた可能性も否定できません。

近年、個人や講などが祭祀する小祠の行方について、とりわけ人口減に悩む地域においては、信仰の継承がとても難しくなっています。積丹町においても祭神やさまざまな奉納物の行き場についての相談を受けることが多くなってきました。

また、2020年からのコロナ禍により、祭祀の中止、あるいは図3のように祭日に銘々の参拝に限るなど、祭神を祠から宿に遷して祭祀するといったこれまでの形態が崩れかねない状況です。今のうちに、少なくとも北海道の祭祀状況は、継続して記録していくことが筆者の責務と考えています。

参考文献

- 池田和生 1959. 川裾雑記. 西郊民俗, 9: 16-19. 西郊民俗談話会.
- 篠田統 1979. 川裾祭. 風俗古今東西民衆生活ノート: 193-202. 社会思想社.
- 西岡陽子 1977. カワソ祭考. 地域と文化: 本位田重美先生定年論文集: 321-346
- 日本国語大辞典刊行会編 1994 [1979]. 日本国語大辞典(縮刷版). 3: 272. 小学館.
- 柳田國男 1910. 石神問答 (1990. 柳田國男全集. 15: 7-200. 筑摩書房)

「はっけん広場」冬の活動報告

体験学習室「はっけん広場」の試験的再開！

川村 昌江

学芸部道民サービスグループ 解説員

博物館の体験学習室「はっけん広場」は、新型コロナウイルス感染症の流行がはじまってから閉鎖され、利用者がいなくなり、すっかり静かになってしまいました。その間、解説員は、資料の整理やはっけんキットの補修をし、オープンしてからのイベントの準備を念入りに計画していました。

そんな中、ようやく、2023（令和5）年2～3月、土・日限定で「はっけんイベント」を再開することになりました。利用者をお迎えするのは、随分と久しぶりのことで、解説員もコロナ感染拡大防止の対策として、「安心・安全」に利用していただくための話し合いをし、運営を行いました。しかし、人気の「はっけんキット」のコーナーは、残念ながらまだ利用できません…。

イベントの内容は、「羊毛ふわふわボールをつくろう！」という羊毛を使



ったワークショップでした。昨年の春に原毛（羊から刈り取った状態の毛）を頂き、汚れのひどいところなどを取り除き、石鹸水で丁寧に洗ったものを使用しました。よ～く羊毛を見ると、乾燥した細かな草が中に混ざっているのが分かります。「はっけんキット」には、羊毛を扱ったものがありますので、利用が再開した時は、ぜひ観察

てみてください。

4月以降の「はっけん広場」の利用については、コロナ感染拡大の状況を見て、当館ホームページなどで、お知らせしますので、ご確認いただければ幸いです。新しい「はっけんイベント」も計画しておりますので、楽しみにしていってくださいね！

第20回企画テーマ展

「あっちこっち湿地」リメイク展示開催！

表 溪太

研究部自然研究グループ 学芸主査

北海道は湿地の宝庫で、湿原・湖沼・干潟・藻場などさまざまな湿地を見ることができます。湿地は多様な生きもの

のくらしも支えています。しかし、人の生活に近いからこそ大きく変化してきた環境でもあります。かつて、石狩川流域には釧路湿原を上回る日本最大の湿原が広がっていましたが、過去150年の間にそのほとんどが開拓され、水田地帯に変わりました。

当館では、2021年の夏に特別展「あっちこっち湿地」を企画しました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、開館できたのは8日間だけになってしまいました。再企画を希望するご意見を多数いただきまして、この度、企画テーマ展「もっと！あっちこっち湿地」（2023年2月25日～5月28日）として、リベンジできることになりました。

絶滅してしまった北海道産のトキやカワウソの標本や、湿地の開拓に使われた道具など珍しいものをどっさり展

示しています。また、湿地を歩く感触を体感できるコーナーやフットスイッチを使ったしかけなど、感染対策として手で触るのではなく足うらで楽しむ体験展示も用意しました。この春は北海道博物館で湿地にハマってみませんか？



写真：ゆらゆら湿地体験

アイヌ民族文化研究センターだより

アイヌ文化紹介小冊子『ポン カンピソシ』のご案内

当館アイヌ民族文化研究センターが編集・発行している、アイヌ文化を紹介する小冊子『ポン カンピソシ』。第1巻「イタク はなす」(アイヌ語)から第9巻「地名」まで、各巻ごとにテーマを定めた、A5判32ページの冊子です。

■全部で9冊あります

各巻の表題とテーマは次のとおりです。

- 1 イタク はなす(アイヌ語)
- 2 イミ 着る(衣服、装身具)
- 3 イペ 食べる(食文化)
- 4 チセ 住まい
- 5 イミ 祈る(信仰、儀礼)
- 6 ウエネウサラ 口頭文芸
(口承文芸)
- 7 芸能(歌、踊り、楽器)
- 8 民具
- 9 地名

各巻とも、それぞれのテーマに関する解説と、学習のための参考文献や見学したり体験したりできる施設の案内などを掲載しています。



■冊子版とPDF版があります

各巻とも、紙の冊子のほか、誌面をPDFファイルにしたものを作成しています。PDF版は当館のウェブサイトに掲載しており、私的に使用する範囲であれば、プリントアウトしたりダウンロードしたりして使っていただくこともできます。

PDF版は基本的には冊子版をそのままPDF化していますが、一部、冊子では誌面の制約で載せられなかった写真を補ったりするなど、巻によっては冊子版より少し情報量が多いものがあります。機会があればぜひ一度ご覧ください。

なお、冊子の刊行からPDF版の作成・ウェブサイト搭載まで少し時間がかかりますので、時期によっては、冊子版とPDF版とでバージョンが異なる場合があります。それぞれの奥付にある発行年月などをご確認ください。

■冊子版を読むには/入手するには

冊子版は、当館の図書室のほか、道立図書館をはじめ道内の主な図書館、博物館等に送付していますので、これらの施設でご覧いただくことができます(所蔵・閲覧については各施設に事前にご確認ください)。

また、学校の授業などでのご利用を希望されるときや、学習・研究のため希望される方々には、当館から冊子を配布することもできます。冊子の代金は無償ですが、部数に限りがあるため、事前に当館までお問い合わせいただきますよう、お願いいたします。

(アイヌ民族文化研究センター長
小川正人)



小冊子2(着る)より：冊子版にはオホシヨウの樹木の写真を掲載していますが、WEB版ではその樹皮を剥がしている状態の写真も載せています。



小冊子2(着る)より：冊子版に刺しゅうによる文様を載せている着物について、WEB版では着物の全体の写真も載せています。

小冊子に関する問い合わせは……

TEL 011-898-0456

(北海道博物館総務部)

E-mail Hacrc.1@pref.hokkaido.lg.jp

PDF版へはこのQRコードから閲覧いただけます。



活動ダイアリー

2022年12月～2023年2月の記録

※■は展示活動、■は教育普及活動、■はその他の博物館活動です。

■第3回蔵出し展「久保寺逸彦文庫—アイヌ文学研究者による調査と資料をとおして、時代をさぐる—」を1月15日まで開催。



12月3日(土)

■チャレんが古文書クラブ⑩を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

12月4日(日)

■ミュージアムカレッジ「久保寺逸彦文庫を見る・読む・聞く」③を開催。担当：遠藤志保。

12月10日(土)

■子どもワークショップ「北広島市でみつけた貝の化石で標本をつくろう！」を開催。担当：圓谷昂史・久保見幸・成田敦史・畠誠氏（北広島市エコミュージアムセンター知新の駅）。

12月11日(日)

■「アイヌ語講座(第1回)」を開催。担当：遠藤志保・吉川佳見。

12月17日(土)

■総合展示クローズアップ展示、1～5テーマを展示入替。

①「近世蝦夷地の古文書」

②「北海道の引札あれこれ」

③「萩中美枝さんの仕事」

④「新しく仲間入りしたアイヌ民族に関する資料たち」



来館者数

○2022年12月～2023年02月

総合展示室 8,049人 特別展示室 3,692人 はっけん広場 45人

○累計(2015年4月～2023年2月)

総合展示室 714,896人 特別展示室 509,597人 はっけん広場 120,829人

⑤「職人の道具と技術」

⑥「あっちこっちマッチ～マッチのデザインをめぐる旅」

⑦「アライグマの骨、全部見せます」

■ミュージアムカレッジ「アイヌの英雄叙事詩を聞く—うたと言葉—」を開催。担当：奥田統己。

12月18日(日)

■チャレんがワークショップ「博物館で新年祈願!？日本の画材で絵馬づくり」を開催。担当：田中祐未・三浦泰之・水島未記。



12月21日(水)

■令和4年度北海道総合博物館協議会、アイヌ民族文化研究センター専門部会を開催。

12月24日(土)

■チャレんが古文書クラブ⑪を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

12月25日(日)

■「アイヌ語講座(第2回)」を開催。担当：遠藤志保・吉川佳見。

1月8日(日)

■「アイヌ語講座(第3回)」を開催。担当：遠藤志保・吉川佳見。

1月14日(土)

■ミュージアムカレッジ「ハレの日の装い」を開催。担当：亀丸由紀子・尾曲香織。



1月15日(日)

■ミュージアムカレッジ・映画上映会「あるカメラ愛好家が撮影した戦前・戦後の札幌」を開催。担当：三浦泰之。

1月21日(土)

■子どもワークショップ「博物館のなかで宝さがし」を開催。担当：舟山直治・池田貴夫。

1月22日(日)

■「アイヌ語講座(第4回)」を開催。担当：遠藤志保・吉川佳見。

1月28日(土)

■連続講座「はじめての古文書講座①」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

1月29日(日)

■特別イベント「博物館のウラ側を見てみよう」を開催。担当：博物館研究グループ。

2月4日(土)から

■はっけんイベント「羊毛ふわふわボールをつくろう!」を開催(2・3月の祝日を除く土・日)。



2月4日(土)

■連続講座「はじめての古文書講座②」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。



2月11日(土)

■連続講座「はじめての古文書講座③」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

2月12日(日)

■ミュージアムカレッジ「北海道における養蚕業とそれにまつわる建物のかたち」を開催。担当：鈴木明世。

2月17日(金)

■総合展示クローズアップ展示、1テーマを展示入替。

②「新しく仲間入りした歴史資料たち」

2月18日(土)

■連続講座「はじめての古文書講座④」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

2月25日(土)

■第20回企画テーマ展「もっと! あっちこっち湿地～自然と歴史をめぐる旅～」をオープン。5月28日まで開催。

■連続講座「はじめての古文書講座⑤」を開催。担当：三浦泰之・東俊佑。

森のチャレんがニュース 第31号

発行日: 2023年3月28日

編集・発行: 北海道博物館

〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌53-2

Tel. (011) 898-0456 Fax. (011) 898-2657

ウェブサイト <https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp>

©Hokkaido Museum, 2023